

## 「ワイシャツとネクタイ」

(2004)

定年でサラリーマン生活を卒業し「ワイシャツ＋ネクタイ」の生活から解き放たれた事が何にも増して嬉しかった。違和感を体全体で感じながら、とうとう最後まで抵抗出来ず、結局38年間着続けていた。自分ではささやかな抵抗の積もりで、白いワイシャツだけは避け、派手な縞々シャツやカラーシャツばかり着てはいたが、体とのフィット感は改善される訳は無い。

昔から「ワイシャツは上着か下着か？」という問い掛けがよくある。その答えはどちらでも良いが（歴史を辿れば実はどちらも正解である）、この着辛い（裾は長く、ボタンは多過ぎ）、形だけの、まるで中世の遺物のような滑稽な衣服を今や世のサラリーマン達の全て、そして日本中で、いやいや世界中の男達が着ている。共産主義体制の中国でさえ、最近の資本主義経済のもとではワイシャツ＋ネクタイ姿は当たり前になってしまった。

この長い歴史と伝統のあるファッションについて文句を言うなんて、心ある人から見ると、「素人のたわごとを・・・！」と一喝されるのは承知の上だが、僕はこのファッションが限りなくイヤだった。ところで世界の動きの殆んどがこのスタイルと礼節による政治・経済の交流によって成り立っているのは良く判っている。日本の象徴である或る、やんごと無きお方も「朝、シャツを着てネクタイを締めると身が引き締まる・・・」

とさえおっしゃった事がある、そういえばこの方がお孫さんたちに接する時でさえもいつもこのワイシャツ＋ネクタイ姿だ。

所でワイシャツの、「両脇が短く、前と後ろだけが長く垂れている」あの伝統的なスタイルのルーツをご存知の方はどれだけののだろうか。

股間を覆う下着（ブリーフ、トランクス）が世に登場するのは何と20世紀に入ってからであり、それまでの貴族達の長い歴史の中ではこのワイシャツの長い裾こそが、股間を覆うためにデザインされていたのである。

一日これを着て会社で仕事をしていれば、翌日か翌々日にはもうクリーニングに出さなければならない、どう考えても経済的には不合理極まりない。尤もワイシャツのルーツから言うと、この「襟と袖」は嘗てはお洒落のバリエーションとして脱着式だったそうだから、この歴史こそが現代に引き継がれていればかなりどんなにか良かった事か。

サラリーマンはこれに加えて「ネクタイ」をしなければならない。これが又僕は苦手だった。定年になった今も、洋服入れには山のようなネクタイの束があり、未だに捨てられずにいる。東京で同じくサラリーマンをしている息子に好きなだけもって帰れと言うが、見向きもしない。

このネクタイがイヤで、一時僕は本社の中で一人抵抗を示した事がある。79年、省エネルギーの提唱のもとで、「ループタイ」なるものがある。流行っていた時の事である。これに僕は真っ先に跳びついた。一般的

な印象としては「老人臭い」というイメージがあったが、おかまいなしに何種類かを買い求め、毎日首にぶら下げて会社に出た。妻からは「そんな格好で・・・」と案じられたが、会社や上司からは勿論、誰一人としてお咎めは頂かなかった。ノーネクタイよりは少しはお客さんに対して失礼にならない・・・と独りよがりで信じていた。案の定、正式にはネクタイ程の礼装ではないが、略礼装として一応認知されており、カウボーイの胸飾りと見下す程の代物でもないようだ。